

平成28年6月9日

日本学術会議

地球惑星科学委員会 SCOR 分科会

(報告)「我が国の海洋科学の推進に不可欠な海洋研究船の研究航海日数の確保について」

1 現状及び背景

海洋科学の推進には、大規模な国家的プロジェクトによる直面する課題の解決とともに、将来に繋がる個々の研究者の中、長期的視野に基づく基盤研究が重要である。基盤研究の推進と海洋科学の将来を担う大学院生を始めとする若手研究者の育成においては、多様な研究者の提案に基づく公募型研究航海計画を、ピアレビューを経て実現する海洋研究船の運航日数の確保が不可欠である。

上記のような基盤的研究に供される年間あたりの公募型研究航海運航日数は、平成21-22年度には1200日以上であったが、平成25-26年度には800日程度になり、平成28年度には500日以下となった。運航日数の減少に伴い、例えば、新青丸(平成24年までは淡青丸)の公募採択率は、平成25年度までは60-80%程度であったが、26-28年度は36-44%に減少した。現状は、海洋科学の基盤研究の推進と海洋科学の将来を担う大学院生や若手研究者の育成に不可欠な海洋研究船の公募型研究航海運航日数が著しく不足している。加えて、学術研究船「白鳳丸」及び海洋地球研究船「みらい」の老朽化が進んでおり、その代船建造も重要な課題となっている。

2 報告の内容

上記のように、我が国の研究船をめぐる問題では、全国共同利用に供する公募型研究航海運航日数の減少と大型研究船の老朽化とが大きな問題となっているが、本報告ではより喫緊の課題として公募型研究航海運航日数の減少に関する報告を行う。国立研究開発法人海洋研究開発機構が運航し、全国共同利用研究航海を実施している学術研究船「白鳳丸」と「新青丸」の運航日数を確保すると共に、同機構が運航し、研究船利用の公募型研究航海に提供しているその他の海洋研究船についても運航日数の確保を実現するための対策を講ずる必要があることを報告する。